

2020 年度活動報告

2020 年度はコロナ禍の関係もあり、大人数での集会を断念し、リモートなどを用いながら今後に向けての活動を考えることにした。

活動の一つとしては京都文化遺産の維持継承に関する基本的なアクション・プランである「京都市文化財保存活用地域計画」策定委員会に外部委員として参画し、計画策定に関わっている。ここでは京都文化遺産の維持継承にあたって①「見つける」、②「知る」、③「守る」、④「活かす」の4項目に集約して検討を進めている。

「見つける」については、「旧家等が保管する民俗資料や古文書、近代以降の産業遺産等、社会状況の変化により急速に失われる可能性があるものについては、早急な調査方法の検討を行い、所在の把握と保存の取組に繋げていく必要がある」ことから具体的な対応策を講じることとしている。大学、博物館、企業等との情報共有と共同による調査・研究を推進することが京都の良さを活かすことができると考えており、行政や大学、博物館、企業等の関係主体が、京都文化遺産に関する情報を共有するためのネットワークを構築するとともに、最新の知見や技術を活かして、共同して京都文化遺産の調査・研究を進める仕組みをつくっていく必要がある。また、出土遺物、古文書等の整理、リスト化、公開を推進することにより広く活用されるものとする。

「守る」については京都文化遺産の保管施設の確保に向けた検討を進めている。京都市の美術工芸品、歴史資料、埋蔵文化財、民俗資料等の保管場所や恒温、恒湿の環境には課題が多く、それを良好な状態で次世代に託することができる環境整備を行う必要がある。それと共に、民間が所有する指定文化財の買い上げや京都文化遺産の災害時の受入先（収蔵施設）の確保に向けた手法の検討を行う。

行政の施策に関わりつつ、具体的なアーカイブズの方法を試みている。「京都やきものラウンドテーブル」と題して、京都市文化財保護課と奈良文化財研究所と連携して京都をめぐる陶磁器のアーカイブズを行う。そこでは京都をめぐる陶磁史を紐解くためのヒアリングや研究集会、展覧会及びデータの公開を企図している。現在準備を進めているのは、京都市所蔵の京都指定文化財である「三条せと物や町界隈出土の「桃山茶陶」」を3Dスキャナーで高精細データを取り、公開することを今年度から3カ年をかけて実施するものである。3Dデータをそのまま公開するだけでなく、茶人や料理人、現代芸術家、日本の古典的な器を用いることのない人々など多様な人が注目したところにタグをつけていく。この「視線のアーカイブ」を加えて公開することにより、広く共有されることを期待するものである。

畑中英二（美術学部教授）